

人間失格はなぜ《父の罪》か

I

かつて神西清はその数少ない太宰治論の一つを「斜陽の問題」と題し（昭23・2『新潮』）て、『斜陽』の問題——とでもしたいところなんだが、考へやうによつては、このカッコが邪魔になつてくるかも知れん。カッコを外すと、斜陽の問題といふ頗る象徴的な題目になるわけだが、まあ僕の話はこのカッコを出たりはひつたり、出没自在をきはめるかも知れんから」と説明した。本稿はそれほど面倒はないものの、用心に越した事はないので頭書の題名にしておくが、中心は勿論太宰の最後の力作となった「人間失格」（昭23・6、8『展望』）の、「あとがき」末尾の

「あのひとのお父さんが悪いのですよ。」

何気なささうに、さう言つた。

という個所である。

この作品の殆ど大部分を占める主人公の手記を作者太宰に貸して呉れた（ということになっている）スタンド・バアのマダムが、主人公「自分」の生涯に対する究極の解釈としてふと洩らした右の言葉を、最も大々的に取上げたのは哲学者の梅原猛氏の著作『地獄の思想』（中公新書134、昭42・6刊）第十一章「道化地獄（太宰治）」だったかと思われる（山内祥史氏「太宰年譜の虚実」、『解釈と鑑賞』昭44・5）。しかしその梅原氏は

大森郁之助

この自伝的小説には、ほとんど父のことはでてこない。父を責める言葉はどこにもない。しかし、最後に突然ポツンと、「お父さんが悪いのです」という強烈な言葉が書かれている。まるで大庭葉蔵の全罪悪は、すべて父親にその責任があるように。／この一句も私は深い底意をもった言葉であると思う。

と自ら注意を促した一句が、へほとんど父のことがでてこない小説の決着たりうる事情——いいかえれば、読者にとってどのような読み方をすれば父の出て来ない本文と末尾の有責宣言とが繋がって受け入れられるのか、を、結局明らかにしていないと言わざるを得ない。氏は右の指摘に続けて改行もせず

①実際、彼の地獄は、彼の生まれた家を、考えなくては理解できない。そして父が、父にたいする憧憬と反逆が、彼の地獄の主なる要因であつたのだ。（傍点引用者）

と、この儘では不整合な「人間失格」本文と結尾の句との関係を整合的に理解すべき方途を提唱するのだが、その次にへ考えられてるのは「父津島源右衛門は……」で始まる太宰のへ家なので、「生まれた家を考え」ることその「地獄」が理解される「彼」とは大庭葉蔵ではなくて作者太宰と解される。

では太宰の父津島源右衛門やその支配する津島家が、なぜ太宰の地獄の主要因となるのかというと、氏は「戦前の日本を支配した天皇制に象徴される地主的人間像の本質を、尊敬されんとする意志に」見、

②地主は、なによりここでおのれの支配を正当化するだけの威厳をもたねばならない。尊敬さるべき人間であること、実質はそうではなくてもよい、少なくとも尊敬さるべき人間として他人にはみえること、それが、地主階級がもっとも必要としている「期待される人間像」なのである。(略)しかし、このような期待される人間像も、地主階級の利益のためである。したがって、地主はその内面に旺盛な生への意志をもたねばならない。内に旺盛なる生活欲、外には尊敬さるべき人間像、それがまさに地主的人間像の理想でもあり、矛盾でもあった。

そして「太宰はこういう二重性に虚偽を感じ」た、とする。更にこの、いわば一般論的・抽象的な地主の悪に付加されるべき、太宰個人にとっての独自・具体的な階級悪として、氏は

③『晩年』のなかの「葉」という小説でそと彼は、姉様の婚礼の晩に、「父様が離座敷の貞暗な廊下で背のお高い芸者衆とお相撲をお取りになつていらつしやつた」と書く。父様のお相撲は少年太宰の心に大きなショックを与えたにちがいない。彼が高等学校時代に書いた小説『無間奈落』『地主一代』などの小説には、父がモデルであると思われる極悪非道といえる地主がえがかれている。女中に手をつけ、妾とし、梅毒をうつして殺してしまう。こういう地主が書かれているのは、彼のマルクス主義が地主の像をゆがめたとしても、彼の父にたいする恨みの強さを示すものであらう。

と説く。そしてその後は太宰の諸作品の要約や伝記の抜萃を綴り合わせた一種の八評伝に展がって行き、論の発端の「人間失格」結尾の句の不整合性は遂に置き去りの儘、終ってしまう。

氏の立論の目標は太宰の世界がいかに八地獄だったかを描くにあったか、と(総題たる書名から)思われ、「人間失格」結尾の一句も

じつは話を始めるきっかけ以上のものではなくて、その不整合性などいつまでもこだわる気になれなかったのかも知れない。しかし気にかけるならば、右に引いた氏の論理が近代文学研究の入門段階で八こういう誤りを犯してはならないと教える時の好見本になりそうな、基本的誤謬の積み重ねであることは、仔細らしく言うのが恥ずかしいようなものである。氏はまず①で大庭葉蔵と太宰治、小説「人間失格」と作者の自伝を、混同どころではなく同一視しているとしか思えない論法・言いまわしを用いている。とにかく、二つは混同してはならないものなのだ、という一般的観念論ではなくて、個別具体的条件として太宰治は大庭葉蔵のように漫画家にはならず、東北の温泉場に隠居させられ(て、生を終り?)もせず、八ヒラメに相当するような八父のたいこ持ちみたいな役の男の家に居候となった経験も、八シヅ子に相当する年上の女の八男めかけみたいな生活の経験も、八ヨシ子に相当する稚純な少女妻との破婚体験も、いずれも持たない。そうした差違をわざわざ設けてある作中人物と作者とを、反面で相似した点もある、ということとを契機とし——契機とする迄はよいがそこから一気に飛躍して差違の面には目をつぶり無条件的に同一視する、というのは(同一視してはいない、ただ一方を以てもう一方を推したただけだ、と云うかも知れないが、一方についてのデエタが無媒介・無斟酌に他方に適用されるならそれは実質上の同一視以外の何物でもあるまい)、こう書き出されれば誰しも否定せざるを得ない底の初歩的かつ基本的誤ちというべきだろう。

梅原氏の論法の②項については、或る階級(又は或る職業、或る組織、ときには或る地位、或る個人、etc)は頭の天辺から足の爪先まで完璧な悪で、かつこの世でその階級(同上)のみが悪だ、という、文学の専門研究者の間では既に「真空地帯」と共に骨董品化していると思われる思考態度自体を批判するよりも、この図式的理解によって

は家長が津島源右衛門であってなくても、また息子が津島修治であってなくてもよく、太宰治しか描かなかった大庭葉蔵のみの苦悩は消えてしまっただけで、把握されないことを、確認し合っておきたい。

津島源右衛門の息個有の条件が、それなら③に挙げられているかというところ、これも又作中人物（「無間奈落」「地主一代」の）と実在人物（とくに父源右衛門）との素朴な混同と、更に、大仰に言えば名誉毀損的な臆測との上に成り立っている。

「父がモデルであると思われる極悪非道といえる地主」が「女中に手をつけ、妾とし、梅毒をうつして殺してしまう」という梅原氏の要約は、「無間奈落」（昭3・5、6『細胞文芸』）で大村周太郎が女中のおさだを妾とする件と「地主一代」（昭5・1、3、5『座標』）で狸司家の当主が看護婦瀬川に病毒をうつして死なせる件とを性急に続けたものだろうが、作中人物（といっても、葉蔵の父についてはこの類の設定はなされていない。後述）とモデルの混同は危険だという一般的な慎重論ではなくて、津島源右衛門の方は、例えば最新最詳の太宰伝記である相馬正一氏『評伝太宰治』第一部（昭57・5、筑摩書房）にも「外に愛妾を囲っていたという話は村でも評判」だった（「生い立ち」一）とする（昭43・3筑摩書房刊『若き日の太宰治』『罪の意識』の発生）二では「青森市や弘前市に源右衛門の妾宅があったことは事実だとしても」にとどまる。どちらも咎むべきであるにしろ売春と美人局は咎められる程度が違おうように、「普通」の蓄妾——通常は芸者を落籍するなどが最も想像に浮かび易からう——それ自体は、財力は十分にあって倫理感是十分といえないという程度の人々、つまり万遍なく最高度の尊敬は受けなくとも決して全人的に軽蔑はされず、相当の敬意を払われるハ場Vも持っていて、常人の枠内には優に留まる階層にあっては、非道とか人非人の所業とかは見なされなかったのではないか（ハ男の甲斐性Vという言葉も、事実として

あった）。

太宰自身、「無間奈落」発表の翌々年、「地主一代」発表のその年に落籍した最初の「妻」小山初代さんとの間では「おそらく（略）金持の旦那どりで愛妾との同棲生活を夢想していたもの」（相馬氏『評伝太宰治』第一部、「非合法活動」一）とも評されるような幾つかの挿話が知られており、まだ妓籍にあった同女との交渉の深化は「無間奈落」発表の直後の昭和三年初秋からと見られる（小野隆祥氏「太宰治年譜の問題点」、洋々社・年刊誌『太宰治』創刊号、昭60・7）。私生活の感覚と作中のそれとは同水準と限るまいが、「無間奈落」の中でも大村周太郎がおさだに先んじて「土地の芸者の蝶子を愛して居たがやがて引き取って家を一軒持たしてやつて居た」ことについては、通り一遍の批判的文脈の中に流してしまっている。前引相馬氏著に限らず未だ具体的に報告された事がない源右衛門のハ蓄妾Vが、具体的に記憶され難く報告されるに値しない「普通の」それだった（それに留まった）とすれば（そうとるしかあるまいが）、「無間奈落」や「地主一代」の地主の非道ぶりとは、世俗の「常識」のみならず他ならぬ太宰の私生活感覚・作中感覚いづれから見ても、糾弾するべきものと咎めるにも当たらずなものとの差があったのではないか。時期を「人間失格」執筆の頃にとつて考えても、前年十一月太田静子さんに出産させた女兒に自分の名から一字を取って命名している太宰の倫理感が、矯風会式に硬直していたというふうには想像し難い。かりに「人間失格」が自叙伝に極めて近いものであり葉蔵は殆ど太宰と同一人物視し得るとしても、ハ父の罪Vという句を、作品本文の背後に想定した源右衛門の行状（——に対する太宰の心象）によって、納得する訣にはゆかないのである。

ついでながら、これも直接葉蔵について・「人間失格」の本文に絡めてではないが、ハ父の罪Vの心因として太宰の出生に関する妄想を

参酌する意見をしばしば聞く。これは

(イ)習作「口紅」(大正15・9『青んぼ』創刊号)に現れる、遠く離れ住んでいて十年も会っていない「オめかけ」の母をもつ息子というモチーフ

(ロ)随想「六月十九日」(昭15・7『博浪抄』)で明言された、「子供の頃、妙にひがんで、自分を父母のほんたうの子でないと思ひ込んでゐた事があつた」という事実

(ハ)の具体化・限定形象として)例えば昭和十九年の「津軽」取材旅行で子守りのたけ女に再会した折、ハ私は五所川原のガッチャ(次項の叔母きゑ)の子ではないのか?と「貞顔で」たずねた(相馬氏『若き日の太宰治』、「性格形成の背景」四)という事実

(ニ)「思ひ出」第一章等でよく知られているように母の妹きゑの手で育てられ、津島邸内のきゑ母娘(当時きゑは寡婦)の居室とその前の広い板の間を幼少時の「生活空間」として過ごした(相馬氏『評伝太宰治』第一部、「生い立ち」一)という事実

(ホ)「無間奈落」での、大村周太郎が妻の妹の娘(太宰がモデルと見られる少年大村乾治からいえば従姉)と「特殊の関係があつた」という設定

等を総合して、太宰は源右衛門ときゑの不倫の関係(その結果が太宰)を妄想していた(その不倫を「人間失格」の父に投影し、父のハ罪Vとよんだ)か、とするものである。

妄想の存続時期はというと(ロ)の「六月十九日」に、生家の出入りの者に聞き廻った結果「私がこの家で生れた日の事を、ちゃんと皆知つてゐる」ので「疑念を放棄せざるを得なかつた」とあるから昭和五年の生家からのハ義絶V以前に疑念は晴れたもののようだが、叔母(と父)の子という妄想ならばハこの家で生れたV日の諸状況の証言

の存在によって直ちに否定はされないかも知れない。とすれば十九年にまだ疑っていた(ハ)ということも有り得る理屈だが、一方、例えば美知子夫人の

私はそのこと(ハ)の太宰の質問)をたけさんがたけさんを訪れる人たちに話す。聞いた人たちは太宰が本気にその疑いを質したと考える。それは困る——と思っていた。太宰には妄想癖がたしかにあるが、自分の出生に関して心から疑っていたとは私には考えられない。たけさんへの甘えと、貧しいみなりで訪ねてゆき(「津軽」参照)昔の奉公人の家に厄介になる、その自分のおかれた状況から出た言葉に過ぎない。(昭53・5人文書院刊『回想の太宰治』、「アヤマメの帯」)

といった解釈も、かくべつ太宰の弁護になりそうもないだけに無視し得まい。可能性としてはどちらも軽々には否定し難かるうが、敢て真剣な疑いと仮定しての論を深めて行くには、(イ)ハ(ホ)の一見多面的な徴証がその実一点に収斂していないことが気にかかる。即ち、甚だ漠然とした(ロ)の疑念は措いて、(イ)の妾腹の子というのと、(ニ)に支えられた(ハ)の叔母の子というのとは、想念のヴァリエーションとか言いかえとかの域を越えた相違があるう。(イ)ならそこにまつわる不道德性はかなりありふれたものと謂えよう(前述)が、(ハ)は、それだけでは格別不道德性は浮かんで来ず、もし相手が父だとすると姉妹の間での妻妾同居という相当の異常事態で、どちらにしろ(イ)と同列には置けない。(ホ)は近親相姦という点では(ハ)の想定の一つ)と共通するが、仔細に見れば(イ)での父の不倫の相手(?)に相当する(ホ)の「義妹」(父と関係した「従姉」の母親ということになる)はその気丈さに対して父から「頌讃」「尊敬」を捧げられていてこちらの不倫は想像し難く、具体的な人間の組み合わせに於て(ハ)とは別趣であり、作品中で(ホ)の設定をなしているということが直ちに実生活についての(ハ)の仮定の蓋然性を高

める、といったものではない。

つまりこれらは、どれか一つを取上げて周囲を見回せば共通点をもつ類似資料は幾つか見出せて裏付けとなりそうなのだが、じつは、少しづつ異なるそれらの中のどれを取上げた場合もほぼ同様に類似資料は得られてしまうのであって、通常、複数資料の指し示す方向が合致した場合にその資料（群）の証拠力が依拠するに足りるものとされることからすれば、今の場合、幾つかの異なる方向がどんぐりの背比べ式に並んで指し示されてしまうので、その中の一つの指し示だけに依拠してしまう訣にゆかないのではないか。偶々、それらの中で最もどぎつい（どぎついということとは即実性を意味しはしないのだが）「無間奈落」と伝記的事実である叔母コンプレックスとが印象的である為に、その具体的内容のくいちがい（相手が従姉か叔母か）は看過されて大まかな範疇の共通（父の近親相姦）のみが複数資料の合致項であるゆえに大前提として信憑され、それなら具体相としては「無間奈落」型と叔母コンプレックス型とのどちらを太宰の内面の原像として想定するか、といえば、子供の立場から見ても深刻であり「人間失格」末尾の一句を納得させやすいところの叔母との近親相姦（→《父と》叔母の子供）Vという想念の方を——右の納得させやすきの故に——それとして想定する——というのだったら、恣意と御都合主義の連続とでもいうしかあるまい。

しかも太宰内部の想念の推測で終らず、そうした想念を懐かしめた（火のない所に煙は立たぬ）源右衛門の実生活が臆測され、だから「人間失格」で葉蔵の父が問責されるのも無理はない、などと不検束に延長増幅されて行ったら、主観的には作品解明意欲の熾烈でも客観的には深刻な顔をしたデマゴグにすぎまい。ちなみに、梅原氏などはそこに出来る極悪非道の地主Vを源右衛門がモデルと思われるVとする作品の一つ、「地主一代」の小作争議は、津島家とは何の

関りもない秋田県前田村の大地主庄司家のそれが素材と見られ（相馬正一氏「太宰治とその時代」⁽⁶³⁾、陸奥新報昭46・7・27）、津島家に關しては、これも参考にされたか？という程度の争議さえ、少なくとも地元在住でない研究者の間には知られていない筈である。明治四十年に新築落成した大邸宅は周辺に村役場や警察署を配し警察署の屋上には高い望樓を組ませてハ小作争議に備えVたとも謂われるが、そうした対策によって未然に防がれたのだとしても、無かった争議は無かったものであり、大事に至らなかったのは至ったのと同じではない。長男文治氏の代になって後の事ではあるが昭和初年代の凶作当時、津島家では「借り子（下働き）たちの食事もよかつたらしく、ほかの地主の借り子たちは『おらほじゃ、たくあんもなくなり、しょうゆがおかずじゃ。ヤマゲンはいい』とうわさし合っていたそうだ」との伝聞もある（昭56・6朝日ソノラマ刊、朝日新聞青森支局編『津島家の人びと』「つかの間の平安」）。

つまり津島源右衛門を以て、客観的かつ常識的に見て、その投影作中人物がハすべて……の罪Vと断ぜられて然るべき人物、とする裏付けは、——私行上でも、地主階級としての業務上でも、少なくとも現在のところでは得られていないのである。それにそもそも、太宰文学の主観性（偏見といってもいい）の強さは公認されており、それが魅力の一つともなっている筈だ。そうした太宰作品の中の断罪を、断罪対象の客観的実態と照合して納得しようというのは、——納得できる筈だ、できなければ困る、などと考えたら、かえってひいきの引き倒しであり、不見識を暴露するものかも知れないのである。

II

——とはいえ、断罪対象が客観的に断罪に値いすることを、作品本

文以外の、作者の伝記的事実や社会常識に拠って納得したくなるのも無理はない程、「人間失格」中に述べる事柄や本文の語り口からは、父が悪いとあっさり言っているのだから、所以は容易に理解できない。この点は多くの研究者（ほとんど父のことはでてこない）と言ってそれきり本文の検討を打ち切ってしまった梅原氏のようなケースも含めて）を悩ませ、例えば最近も年刊誌『太宰治』創刊号（昭60・7、洋々社）の「人間失格」特集で鶴谷憲三氏『「人間失格」における「父」の位置』が、「（第一の手記からは）『あのひとのお父さんが悪い』という原因を明確に指摘することは困難である」とか「（第三の手記『一』で）『父』が語られている箇所は直接的には何も見当らない」とか慎重な留保を交えつつ、ようやく（と云っても失礼ではあるまい）、最終結論としては「葉蔵の人生を鋳型にはめこもうとし」た点で「おそろしく「悪い」存在である反面、「最終的に依存するところも『父』であり、それは葉蔵の甘えという形にあらわれ」、また「不安と恐怖心とにさいなまれつづけてきた葉蔵からみれば、ある意味では『父』は妬ましいまでに自信を秘めた『実生活』上の達人として映って」もいた、いわば葉蔵の存在の全ての面にわたる支配者と捉え、末尾の一句もそこまでの本文から理解しうるもの、いいかえれば必ずしも唐突ではないという読解を提示している。

しかしながらその慎重な鶴谷氏の論さえ猶、末尾の一句がそこまでの本文から理解しうる筈。理解しうるような読みが正しい読みで、それに到達すべきなのだ、という大前提にも幾ばくかは牽かれていて、ではないかと思われる節が、ないでもない。勿論、そこまでの本文から理解しうるような結末であるのが作品のノオマルなあり方だろうから、そういう読みを求めるのがノオマルな態度であるに決まっているが、かりに作品の方がノオマルでなかったら生真面目な努力ほど泥沼にはまり込んでしまうという事もあるう。

例えば父の強圧という点だが、「前から自分（葉蔵）を高等学校に連れて、未は官吏にするつもりで、自分にもそれを言ひ渡してあったので、口応へ一つ出来ないたちの自分は」本当は「美術学校にはひりたかつたの」だが「ぼんやり」父の指示通りに東京の高校にはいる。しかし高校に入学はしたが洋画塾に行って「三時間も四時間も、デッサンの練習をしてゐる」日もあったのだし、結果的には官吏になどならず、最後の（かつ、生涯唯一の）生業は漫画家であった。「三流出版社」の注文で子供雑誌や「駅売りの粗悪で卑猥な雑誌」に載せる、流行漫画の模倣作や「自分ながらわけのわからぬヤケクソの題の連載漫画」を「酒代がほしいばかりに画」く、「大きな歓楽も、また、大きな悲哀もない無名の漫画家」では、中学時代に夢みた、「自分のお道化の底の陰惨」をそのままに「お化けの絵」を描くゴッホやモデリアニバリの画家とは、大分違う。しかし、ヨシ子を内縁の妻にした直後には「定つた職業になりかけて来た漫画の仕事に精を出し」「自分もひよつとしたら、いまにだんだん人間らしいものになる事が出来て、悲惨な死に方などせずにはすむのではなからうかといふ甘い思ひを」いだいた一時期もあったのだし、成人用の漫画には「たいいていルバイヤットの詩句を挿入し」たというのは、「ふざけ切つた匿名」とも相通ずる姿勢だろうが雑誌社の注文とも思えず、葉蔵の自己本然の欲求の発現（歪んだ発現にしろ）ではなかったか。それでも芸術家と漫画家では社会的な格が違う、などというのは凡そ非・太宰的、非・葉蔵的なハ世間Vの基準である。少なくとも父の希望した官吏等、「清く明るくはがらかな不信」の上に「互ひにあざむき合つて、しかもいづれも不思議に何の傷もつか」ない、ハ世間Vの表街道の職業・生活よりは虚偽の少ない（と、葉蔵に思える）生活に、行きつき得たことにならないか。葉蔵の希望がその通りに認められなかったのは事実だが父の意志に完全に支配されたわけでもなく、希望と正反対の・希望が少

しも生かされない道を歩まされてしまったとは云えなからう。

又、小さな事ではあるが中学受験に際して、遠縁の者の家が近くにあるという「理由もあつて、父がその」中学校を選んだ、というのは、その他の（主たる？）理由が理不尽なものだったのか、どうか（遠縁云々はまあ正当な理由といえるだろう）。逆に、他の学校を選ぶべき理由はあったのか、どうか。葉蔵に別の希望があったのか、どうか。それらが記されていないので、父の選定が圧制とか横暴とかいうことになるかどうか、はっきりしないのである。

飛んで高校入学後、出席日数不足などが家に知れ「父の代理として長兄が、いかめしい文章の長い手紙を」よこすようになった、とか、心中未遂を起こした折故郷から駈けつけた「親戚の者」が「くにの父をはじめ一家中が激怒してゐるから」と義絶の予告をした、とか、その後は身元引受人のヒラメの所に「兄たちが、父にかくして送つてくれてゐるといふ形式」で極めて小額の送金があった、とかの件では、父は単独でなく、時には「家」の構成員の一人として対応している（逆に家の意志の代表者として振舞うこともあるのは当然だが）点も、注意されよう。反面、送金増額の予定を秘し「用心深く持つて廻つた」身の上相談の強要で、葉蔵の「生きて行く方向」を「まるで変」えてしまったのはヒラメだし、モルヒネ中毒となった葉蔵が「この地獄からのがれるための最後の手段」として書いた「故郷の父あて」の「長い手紙」には「待てど暮せど何の返事も無」く、或る日ヒラメが「悪魔の勘で嗅ぎつけたみたいに」堀木を連れて現れ脳病院に入院させてしまう。この辺の書き方は微妙で、ヒラメの行動が父の指示を受けたものとはとり難いが、後に長兄が引取りに來た際その理由のように「父が先月末に（略）なくなつたこと」を告げていることからすると、入院は周囲の者が父の気持を推し測つて、といった程度の関わりを考へるべきだろうか。そして、病院で「人間、失格」と感じた葉蔵を田

舎に退居させ、善意に発することながら結果的には「まさに癡人」と自覚させることにもなるのは、善悪は別に、誰の指図かといえは父の死によって代つて新しい家長となった長兄のそれであった。

つまり、父は葉蔵の生涯に対する「支配」の主役ではあつても唯一者や独裁者ではなく、その支配も決して完璧ではなかった。父の死を知つて、「自分の胸中から一刻も離れなかつたあの懐しくおそろしい存在が、もうゐない、自分の苦悩の壺がからつぽになつたやうな気が」し、「自分の苦悩の壺がやけに重かつたのも、あの父のせゐだつたのではなからうかとさへ思はれ」た、というのは、具体的影響ではなく殆ど感覚的・気分的なものだから、理屈ではなく恐ろしかったのだ、他人には判らない気持だ、と云われればそれ迄だが、父に対する気分・感覚の最も詳しい具体例である「第一の手記」の、東京土産について父の意を付度し迎合する件も、順序としては人間一般に対する不可解感、次いでその典型例として「子供の頃から、自分の家族の者たちに対してさへ、（略）どんな事を考へて生きてゐるのか、まるでちつとも見当つかず、ただおそろし」かつたことを述べた後に、その顕著な例の一つとして紹介されており、確かに叙述の分量は他の例に比して圧倒的に多いが、父だけが不可解感恐怖感の対象だったという訣ではない。葉蔵の主観上の問題が大きいと見てもその主観も首尾整つて描かれているとはいえず、作品本文から末尾の一句が自ずと納得されるような構成・表現は、十分になされていないと云わざるを得ないのである。

短篇小説の鮮かさに比べて太宰の長・中篇は構成の弱さを云われることが多いから、意余つて力足らず、作意を支えるべき構成が十分に出来なかつたという事も、有り得ない・想像し難いという訣ではないだろう。作品本文からはどうにも「父のせい」と考え難いなら、読み

手の鈍さではなくて表現の不備を疑ってもいい筈である。それでは構成が整わないのに先走ってしまうような、いわば衝迫性の作意が想定し得るかといえば、葉蔵が太宰の自画像であり自らの父を告発したもののだからというような下りの独断の押っ被せとは区別した上で、葉蔵のモルヒネ中毒・脳病院入院が太宰自身のパビナル中毒による昭和十一年秋の武蔵野病院入院事件と、又、「人間失格」という題名が太宰流の入院記録というべき十二年四月発表の「HUMAN LOST」(『新潮』同号)のそれと、無関係に発想されたとは考え難からう。

本稿前半で基本的理解として繰返した太宰と葉蔵の非同一性は、葉蔵が二十四歳(?)で脳病院から田舎に退居し(「それから三年と少し経った時点で」「ことし、二十七」とある)恐らくそれきり、生きてはいたとしても社会生活には戻らなかったと見られるのに対して、二十八歳(数え)の太宰は約一ヶ月で退院後、暫く低迷はしたが翌々年頃から健康な明るさを加えた作風に転調、現未亡人美知子さんとの家庭を守って行った点にも端的に表われている。しかし成立した形象の相違とは別の事柄として、二十三年に「人間失格」という題名を拵んだ時の太宰が、十一年前にその英訳(順序は逆だが)「HUMAN LOST」という、衝撃的な告発・暴露的作品(衝撃性の自覚は四年後の単行本初収時の著しい改稿に窺える)を発表していること、又、八年前に「あのころ(『四年まへ』『或る不吉な病院』に入った頃、の意)の事は、これから五、六年経つて、もすこし落ちつけるやうになつたら、たんねんに、ゆつくり書いてみるつもりである。『人間失格』といふ題にするつもり」と書いた(『俗天使』、昭15・1『新潮』)ことを、忘れていたとは思えず、また読者がそうした関連に於て読むだろうことを無視し得たとも考え難い。「人間失格」で主人公の名「葉蔵」は第一の手記をはじめ何度か現れるものの、「大庭」の姓は第二の手記で中学の教師が「このクラスは大庭さへるないと、とてもいい」の

だが、と言う、と、無理矢理に出番を作った感じで記され、十三年前の「道化の華」(昭10・5『日本浪曼派』)の主人公——「自画像」と意識的に繋がらせようとした観えある。

葉蔵の「人間失格」が脳病院入院という一事をさすのかどうかについては、幾つかの要件拡散説が出されている。例えば、入院した二十四歳は太宰の実生活では昭和七年、七月と十二月の両度それぞれ青森警察署・青森検事局に出頭を命ぜられ社会主義運動との絶縁を誓約したとされる年齢に当たり、太宰が運動からの脱落・同志への裏切りを以て「人間失格」と感じたことの反映と見るのは、太宰の入院年齢二十八歳から殊更(同年齢に設定する必要はないが、設定しやすくはあろう)ずらした心理としては首肯できそうだが、そのずらした「失格」年齢に設定された事件そのものは運動脱落でなくて入院の方なのだから、本末を顛倒してはまずからう。また、ヨシ子が犯される件が葉蔵の入院に先立ちそれがモルヒネ中毒に至るそもその原因となっていることを以て、太宰の実生活では入院中に起こり退院後に知る初代さんの過失の、打撃の大きさ(それに基づくヨシ子の件を右のように設定する程の)——従ってその投影としてのヨシ子の件の重大さを云う説や、幼少時から「人間の生活といふものが、見当つかない」だった(第一の手記冒頭二行目)葉蔵はもともと「人間失格」者だったのだとする説も、見うける。しかし前者に対しては「ヴァジニティ」「無垢の信頼心」の象徴としてのヨシ子(の事件)と初代さん(同)との本質的相違についての塚越和夫氏の指摘(「人間失格論」、昭47・4芳賀書店刊『批評と研究 太宰治』)があり、ヨシ子の件が初代さんの件に照応するものとは云えないとすれば、前記、モルヒネ中毒との先後及び因果関係の設定も或る原型からの殊更な改変として強調の意図を読みとるわけには行かず、この設定から直ちに重大性を断ずることは出来まい。又、論者の人間観からすればとくに「失格」していた

と見えても、葉蔵の自覚（『作者の説示』として「人間、失格。」／もはや、自分は、完全に、人間で無くなりまい、」（傍点引用者）と記されたのはあくまで入院の段階に於てであることを、無視してはならない。

結局、脳病院入院という人間失格の事態を導いた要因や、その失格の性をより徹底せしめた要因は複数個指摘し得ても、これが起きなければ失格とは謂えなかったという本体は入院の一件とせざるを得まいが、それでは、その件のモデル乃至モチーフとしての太宰自身の入院は、十二年前の「HUMAN……」では、その父とどう結びつけて扱えられていたか。

太宰の父源右衛門は、息子の脳病院入院中に死ぬ葉蔵の父と違って十三年前、太宰十五歳の太正十二年に死亡しているから、現実の結びつけ、現実的な問責は有り得ない訣だが、「HUMAN……」では入院三週間後の十一月四日付の部分に「（四日、亡父命日。）」と前後との直接の関連なしに思い出され、十日付で「私が悪いのです。私こそ、すみません、を言へぬ男。私のアクが、そのまま素直に私へ又はねかへつて来ただけのことです。」という謝罪の言葉の後に謝罪する相手を「よき師よ。よき兄よ。」等々と列記した、その最後に「亡父も照覧。」と記す。もともと「HUMAN……」の対他姿勢は入院頭初の攻撃的から後半の妥協・和解的へと、入院一ヶ月の間はかなり変化しており、四日付の部分にしても『なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ。（略）誠に、なんぢに告ぐ、一厘も残りなく償はずば、其処（獄）をいづること能はじ。』（マタイ五の二十五、六。）と、かなり厭味ながらもかく自戒を記し、「一銭（世間——初代さんをさすか？）を笑ひ、一銭に殴られたにすぎぬ」とその意味を限定し「私の瞳は、汚れてゐなかつた」と本質的無謬を主張しながらではあるが「われ完璧の敗北を自覚した」と、昂奮の冷却——少な

くとも自己の外貌についての客観的認識を記すに至っている。しかしそれ以前、入院頭初の激昂の時期には亡父への言及はないのだから（激昂をぶつける対象として取上げられなかったということも、間接的徴証にはなるかも知れないが）、右の二箇所も妥協的に変った結果とするのは臆測を出ない。

ところで前にもふれた通り、「人間失格」では「鎌倉の海」での心中未遂に際して「父をはじめ」一家の激怒が云われ、その後の生家からの送金は兄達が「父にかくして」とするが、この父の立場は、送金云々をへ取決めた額以外の援助と読みかえれば、概ね太宰の昭和五年の鎌倉海岸心中未遂（これも源右衛門没後）時の長兄のそれに近いことが、諸種の伝記的資料から理解される。又、葉蔵の入院に関して父の意向は間接的に作用したもののように読める（前述）が、太宰の入院に際しては井伏鱒二「十年前頃」（昭23・11『群像』）に紹介された井伏の備忘記録に、十月七日付で「初代さん来訪。（略）郷里の家兄津島文治氏に報告し至急入院させたき意向なりと云ふ」とあり、入院前日の十月十二日付に「青森の中畑慶吉氏」来訪とあるのは長兄の代理として上京したもののようだから、当然ながら事前に長兄の意向もただした上での決行と考えられる。即ち葉蔵の身に関する重大局面での父の関与状況は太宰の長兄のそれに、ほぼ見合っていると云え、更に「人間失格」で長兄が脳病院から引取った葉蔵を、「生れて育つた町から汽車で四、五時間、南下したところ」にある「東北には珍らしいほど暖かい海辺の温泉地」の「村はづれの（略）茅屋を買ひとつて」住まわせる、という条は、前引井伏の記録で退院後の措置案の一つに「文治氏の懸案」とあるのを相馬正一氏が「郷里に連れ帰り、略農の仕事でもさせて健康の恢復を図りたいという意見」と説明する（昭58・7筑摩書房刊『評伝太宰治』第二部、「パビナル中毒」二）のに依るなら（相馬氏が何に拠ったかは不明だが）、相通ずるものが

ないか。

しかし太宰の長兄は、「HUMAN……」では

(1) 母よ、兄よ。(略) 私たちのあがきこそ、まこと、いつはらざる(略) 切々、無言の愛情より発してゐること、知らなければいけない。(略) われらこそ、光の子に、なり得る、しかも、すべて、あなたへの愛のため。／その時には、知るであらう。まことの愛の素晴らしさを、私たちの胸ひろくして、母を、兄を、抱き容れて、眠り溶けさせることができるのだといふ事実を。

(十月二十六日。傍点引用者)

(2) 私が悪いのです。(略) よき兄よ。(略) (十一月十日、前引)

(3) (家兄ひとり、面会、対談一時間。)

(十一月十一日)

としか、触れられていない。(1)の後に「その時には、われらにそつと囁け、『私たちは、愛さなかつた。』とあつて相手方からの愛の不全を諷していることや、(3)で、前引井伏の記録には十一月八日付(日付のくいちがいの理由は不明)で「文治氏、病院に太宰を訪ね会談す。(略) 亡父に会ひたるごとくとて、太宰、涙をながし泣き伏したり。初代さんの語る報告なり」とある長兄との面会を、()で括って註記風にとどめたことには少々引懸かるが、後者は初代さんの取繕りいも考えられ、山岸外史氏は太宰からの伝聞として

応接室で医者をして三人で対決したときの長兄は、太宰に懲りぬいていて、長兄のその冷たさが身にしみたような話もでた。長兄はジロリと太宰をみただけで、ほとんど口をきかなかつたそうである。太宰もほとんど喋ることができなかったという。(昭37・

10 筑摩書房刊『人間太宰治』、「太宰と武蔵野病院」)

と述べている。そして井伏文と山岸文のどちらかが誤り(初代さんと太宰のどちらかが嘘をついた)とも限らず、双方の立場を考えれば太宰は涙を流し長兄は口をきく気にもなれないという状況も十分想像で

きる。とすれば、「HUMAN……」の「対談一時間」という要約はむしろさりげなく取繕りつた、この会見を大切にしたい書き方だったかとも考えられる。そして「HUMAN……」ではそれ以上の反撥や積極的敵対は太宰の側からは生じておらず、(1)自体は勿論分類すれば明らかに長兄を、敵対ならぬ求愛或いは告愛の対象としている。

これも言及は少ないが△母▽については、「人、おのおの天職あり。(略) 私はすすまなければいけないのだ。母の胸ひからびて、われを抱き入れることなし。上へ、上へ、と逃れゆくこそ、われのさため」(十月二十三日、傍点引用者)という絶望・訣別の表明も、たった一ヶ所だが有るには有る。ここは象徴化して用いているかとも思われるし、△兄▽に関してそれが無いのは太宰にとっての心理的浅さ(母に比して)を示すかとも思われるが、同時に、そういう拒否・否定が兄に関しては存しないのも(どういう性質の拒否にしろ拒否は拒否だ)また事実である。

「HUMAN……」は初出稿と単行本収録稿(初収、昭16・5実業之日本社刊『東京八景』)とで改変が著しいが、(父及び)長兄への敵対姿勢が無いのは初出稿が既にそうなので、更にその前段階のなまの感情には違ったものがあつたのではないか、等と疑っていたらきりが無い。と、そう云つては実も蓋もないなら、初出稿(とくに前半)の不検束さは、なまの感情を選別・濾過(或いは世間への妥協として抑制・粉飾)した——といえる程に、した——結果とは解し難く、これとは別個の(といえる程度に異なる)・もう一段奥のなまの感情というものの存在を想定する必然性に欠ける、と言いかえよう。「HUMAN……」の四年後、制作順では「思ひ出」(昭8・4、6、7『海豹』)の次の自伝風作品「東京八景」(昭16・1『文学界』)では、入院の件から長兄を全く抹消(長兄に限らず初代さん以外の関係者すべてだが)してしまっている。入院に絡んで長兄への怨み等が見出せないことは

書簡や随想の類も同様であって、つまり葉蔵のへ父の原型を太宰の父でなく父に代って父の役割をつとめた長兄と考えても、へお父さんが悪いVという断罪はこれを承けている、ここに胚胎しているといえるものは、纏まった形象だけでなく心情的要素にまで枠を拡げても確認はし得ないとするのが、公正な判定と思われる。

現存する諸資料に拠って判断する限り、「およそ『人間失格』中の登場人物は何かの象徴もしくは観念の肉化であって、生きた人間とはいえないふしがある」とした塚越和夫氏（前引「人間失格論」）の言に力づけられ（恐らく見当ちがいに？）、これもかなり観念的な葉蔵の生涯（塚越氏の表現を借りれば「人間太宰治の一生とは比較にならぬほど首尾一貫し、辻褄の合いすぎる」）を、斯く、あらしめる、為には斯くあるべきへ父の観念が、本文中での叙述描写による肉化不十分のまま浮上してしまったもの、と（とでも）見るほかないであろう。^{補註} どうも気の利かない結論だが、胡散くさいよりはまし、としておく。

補註 前引塚越氏はへお父さんが悪いVに続くマダムの言葉「私たちの知ってゐる葉ちゃん（略）神様みたいないい子でした」について、「ほんとうに太宰の自己弁明あるいは葉蔵弁護のことばなのか？（略）太宰のような手練れの作家が、そんな甘いことをするはずはない。（略）『とても素直で、よく気がきいて』——たったこれだけのマダムの葉蔵観には、葉蔵の苦悩がまったく脱落している。女にそう思われたことは、かれの道化の完璧さの証明なのだ。この時の葉蔵とは、あくまで一世間人たるマダムの前で、の名演技者にすぎないのである」と喝破する。これを敷衍すればへお父さんが悪いVというのも薄手な同情の一変型にすぎず、こだわる方が愚直なのかとも思うが、一方、へお父さんが……Vとの間に挿まれた、「何気なささうに、さう言つた」という、作者太宰の言葉も気になる。何気なささうというのは、通常、重大な事を口調だけは意識的に軽く言う場合に使

う。道化の表面しか見えない（手記を「こなひだ（略）全部読ん」だというマダムが今なお葉蔵の苦悩を知らない（理解できない、ではなく）というのも変だが）文字通りの児女の言で事実深い考えは無いと思われる意に、用いるかどうか。その点に疑念がある間は、本稿も徒勞とは思わない。

（昭61・5・8稿）